

# けいせん

2017. 10. 23



園外の方をお招きする行事や、見学・体験で、初めて幼稚園に来る小さい子と一緒に過ごすことがあります。お母さんは赤ちゃんと抱っこしていることも多く、大変そうなので代わりに私が手をつなぐ時には、急に手をとることはせず、まず「私でもいい？」と丁寧なようにしています。

(ここで笑って手をおいてくれる子、しずかに首を横にふる子、どんどん自分で進んでいく子、泣いてお母さんから離れた子など様々です。その子のその時の気持ちを大切にしながら少しずつ遊びに言秀っていくと、だんだんその場にも慣れて好きなおもちゃや遊びを見つけてたのしむようになります。そして時々お母さんを探して視線を合わせたり、一旦お母さんの戸所に戻ってさわつたり泣いたりして「安心感」というエネルギーを補給してまた遊び始めます。その様子を見ていると「お母さん見てる?」「見てるよ」「(よく(わたし)おいてあげ!」「すいね」と、そんな声の聞こえてきそうです。

お母さんという絶対的な安心基地があること、いつも見ていてくれるという安心感があること、が子どもが自発的に遊んだり自分の力で過ごすためにどれだけ大きな原動力となっているかを感じます。

そのような経験を積み重ねる子は、幼稚園というその子にとって初めての社会でも、ルールを守ったり、約束を守ったりと年齢ごとの集団生活にスムーズに入り、たのしみながら過ごすことができます。もちろん個人差はあり、集団生活に慣れるのに時間がかかる子はいますが、「安心すること」を知っている、感じている子は、いつか必ず園生活をたのしむことができます。

乳幼児期に、十分に愛されている、見守られているという安心感を感じながら成長していくことが、子どもがその子らしく生きていくために不可欠です。これは乳幼児期だけではありません。入園・入学など環境の変化がある時、転居や出産等生活が変わる時、また反抗期・思春期など成長・発達の日々にあたる時... その子が求めるだけの愛情と安心感をゆくりたっぷり与えること、これが親にできる最大で最善の援助なのではないでしょうか。

さて、我が家の10歳の壁にぶつかっている長男と理想の自分と現実の自分の間に揺れる時期(もうすぐ5歳)の次男も、それぞれに新しい一歩を踏み出すためのエネルギー(安心感)を求めているようです。こうあってほしいという親の思いは少し横においておき、エネルギー補給に専念します!!